
異説御伽噺 「赤ずきん」

神田白兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説御伽噺 「赤ずきん」

【Nコード】

N0363K

【作者名】

神田白兔

【あらすじ】

優しい赤ずきんと、人間嫌いの狼。優しさに触れた狼は、それゆえに絶望し、赤ずきんは残酷すぎる真実と対面します。表裏一体の悲劇と幸せの中で、赤ずきんは……。異説「赤ずきん」開幕。

昔々あるところに、両親から惜しみなく愛され、そして両親を心から愛す女の子がいました。

女の子の家はとても貧しかったけれど、女の子はたとえ夕食が黒パン一つでも、文句など言わない、とてもいい子でした。でも、ある日村にやってきた貴族の女性がかぶっていた、素敵な赤い帽子が忘れられないという、ごく普通の女の子。

優しい女の子は、その帽子が欲しいなんてわがママは言いませんが、両親はちゃんとわかっていました。

両親はわがママを決して言わない愛しい娘の為に、お父さんは一生懸命働いて、赤い布を買ってやり、お母さんは夜なべして、帽子を作ってやりました。ただ、赤い帽子だと女の子には派手すぎるので、可愛らしい頭巾にして、女の子に贈りました。

女の子は大喜びで、いつでも赤い頭巾を被って過ごしました。

誇らしげに、幸せそうに笑うその女の子があまりに愛らしいので、いつしか女の子は「赤ずきん」と呼ばれるようになりました。

貧しいけれど幸せな家族でしたが、赤ずきんの両親は病気になり、二人を治す薬を買うために、赤ずきんは遠くへ働きに出ることになりました。

赤ずきんは、働くその家で鉄の服を着せられ、その服が擦り切れるまで、帰ってはならないという約束をさせられました。

赤ずきんは文句など一つも言わず、まじめに働き、服が擦り切れるのを楽しみに待ちながら、働いたお金を家に送り続けました。

数年がたち、だいぶ赤い頭巾も鉄の服もボロボロになりましたが、まだ鉄の服が擦り切れず、赤ずきんは家に帰れません。けれど赤ずきんは、やはり昔と変わらずけなげに働き続けました。

ある日、いつものように赤ずきんは森へ、木の実や茸、薬草など

を捕りに出かけました。

そして、出会いました。

狩人の畏にかかり、息も絶え絶えな一匹の若い狼。

この世のものとは思えないほど美しい、白銀の毛並みの狼と。

「近づくな。噛み殺すぞ」

狼は赤ずきんに言いました。

狼は、人間が大嫌いでした。人間は、自分の身の安全の為に、自分を駆除しようとするのではなく、美しくて珍しいこの毛皮目当てで、自分を追い回すから。

狼は人間なんてまずいから食べないけれど、自分に近づく奴は誰であっても噛み殺してきました。もちろん、赤ずきんもそうするつもりでした。

けれど、赤ずきんは困ったように笑って言いました。

「私の服は鉄だから、牙が折れちゃうよ」

思わず、狼は目を丸くして、ぽかんと呆けてしまいました。その隙に、赤ずきんは狼に近づいて、籠から薬草を取り出して、狼の傷の手当てをし始めました。

狼はあまりに予想外な行動に、なんの反応もできず、ただ大人しく手当てされました。

赤ずきんは最後の仕上げに、包帯か何かをまこうとしましたが、彼女はハンカチを持っておらず、服も鉄なので、破ることもできないことに気がきます。でも赤ずきんは、全く何の躊躇いもなく、被っていた頭巾を裂いて、狼の足に巻きました。

その頭巾は、ずいぶんボロボロになっていましたが、ほとんど汚れておらず、何度も縫い直した跡があり、狼から見ても明らかに、とても大切なものでした。

なのに彼女は晴れやかに笑って、狼に言いました。

「これで、大丈夫。もう、あんまり人里に出ちゃダメだよ」

「赤ずきん」でなくなっただ女の子は、狼に手を振って、去って行

きました。

けれどまたすぐに、彼女は「赤ずきん」に戻りました。前よりもずっと、つぎはぎだらけで、不格好な頭巾をかぶって、彼女は森に行きます。

友達となった狼が待つ森へ……

狼と赤ずきんは、たくさん色々な話をしました。

狼は、自分が身勝手な人間に狙われていること、だから人間が嫌いだっただということ、女の子は病気の両親の為に、ここで働いていると、この服が擦り切れないと、自分は家に帰れないことを話しました。

一人つきりだった二人は、自然と惹かれあつていきました。

ある日、赤ずきんはこの上なく嬉しそうに森へやってきました。

彼女は服の袖を見せて、やっと服が擦り切れたのだと言いました。

狼は赤ずきんが帰ってしまうのは寂しかったけど、またすぐに戻ってくると言われたので素直に、喜ぶことができました。

赤ずきんの、故郷を聞くまで。

その地名は、聞き覚えがありました。そして、赤ずきんの名前にも……

狼はその故郷に帰るまでも道のりには、針の道とピンの道があるが、ピンの道を進め、そちらの道には花畑があり、その花を土産にすればいいと赤ずきんに言い聞かせます。

狼がなぜそこまでそんなことを言うのかを、赤ずきんは不思議に思いましたが、狼の言うとおり赤ずきんは、ピンの道を進みました。狼の方は、近道である針の道を進み、一秒でも赤ずきんより早く、赤ずきんの故郷に向かいました。

針が全身を刺す痛みなど気にならないほどに、狼には確かめなければならぬことがあつたからです。

赤ずきんの言っていた、赤ずきんの家に狼は辿り着きました。

そこは、住人がいなくなつて日が長い、廃墟でした。狼の嘘であつてほしい、あたつてほしくない予想は、的中してしまいました。

この家の住人は、赤ずきんの両親は、とつくの昔に死んでいました。

病気ではなく、病気が良くなつて、夫婦で散歩をしている最中、たまたま行き会つた白銀の狼、彼によつて……

狼は、針の道で傷だらけとなつた体を、引きずるようにして、廃墟となつたその家に、足を踏み入れました。

狼は、一体どうやって赤ずきんに詫びればいいのか、それだけを考へて立ちつくします。一番大切な人の、愛する人たちを奪つた罪の償いを、ただひたすらに考へ続けました。

考へても考へても答えが出ぬまま、赤ずきんはやつてきてしまい、狼は思わず、隠れるように埃だらけのベッドにもぐりこみました。

「…………お父さん？ ……お母さん？」
赤ずきんは、廃墟に呼びかけました。ここはもう、誰も住んでないことは歴然なのに。

きつと、赤ずきんはもう、知っているのでしょうか。両親はとおに死んでいることを。もしかしたら、殺したのは自分が両親からもらった頭巾を裂いてまで、手当てをしてやつた狼であることも……

でも、赤ずきんはさすがのように、今にも泣き出しそうな声で、両親を呼び続けます。

その声に耐えられず、狼はベッドの中から言いました。

「こつちだよ、可愛い赤ずきん」

赤ずきんは言いました。

「ただいま、お父さん、お母さん」

明らかに一人しか入っていないベッドに、両親ではなく、友と呼んだ狼の声がするそのベッドに向かつて、そう言いました。

そして、ベッドの片隅にボロボロのいすを置いて、語り始めまし

た。

家を離れて、遠くで働いていた間の辛かったこと、悲しかったこと、そして、狼のことを。

その狼と出会ったときは、あまりの美しさについて、怖さを忘れて近づき、手当てをしたこと。狼が、汚れをきれいに落として、頭巾を返してくれたことが、とても嬉しかったと。

狼は少し素直じゃないけれど、珍しい木の実のありかを教えてくれたりして、とても優しいと。鉄の服の袖を、こっそり裂いてくれたのは狼だということ。狼に出会ってから、そこで働くことが楽しくなつたと、赤ずきんは語り続けます。

まるで、狼に「私は許していますから、だから、自分をそんなに責めないで」というように……

狼は、ベッドの中で泣きました。

赤ずきんが語れば語るほど、許してくれるほどに、こんなにも優しい人の大切な両親を奪った自分が許せなくて、涙が止まりません。赤ずきんは訊きました。

「お父さん、お母さん。どうしてそんなに震えているの？」

「……お前と久しぶりに会えた喜びで、この体が砕け散りそうだからだよ」

「どうして、そんなに声が小さいの？」

「お前に会えたのが嬉しすぎて、大きな声を出すと胸が張り裂けそうだからだよ」

「じゃあ、どうして泣いているの？」

赤ずきんの静かな問いかけに、狼は答えました。

「泣いてなんかいない。笑ってんだよ。お前に会えたことが、幸せで幸せで、だから、笑っているんだよ！」

「そう。……なら、良かった」

二人は嘘をつき続けました。

自分自身が一番騙されたい、本当だと思いたい嘘を。

その後、赤ずきんは働いている家に帰ってはきませんでした。

誰も、赤ずきんの行方を知りません。

ただ、どこかのきこりが、森の奥でつぎはぎだらけの赤い頭巾をかぶった女の子なら、一度だけ見たそうです。

その女の子は、傷だらけの白い狼とともにいたそうです。

寄り添うように、かたくかたく、手を繋いで

(後書き)

異説御伽噺シリーズ第三弾。

グリム兄弟が編集する前、「赤ずきん」の元ネタとなった物語のネタを散りばめつつ、だいぶ内容を変えてみました。

原作からかなりかけ離れてる割には、原形はとどめているなど自画自賛してましたが、赤ずきんって、「赤い頭巾」と「狼」のキーワードがあれば、だいたいは原形をとどめる事に、書きあげてから気が付きました……

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。
もしよろしければ、感想もどうかお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0363k/>

異説御伽噺 「赤ずきん」

2010年10月8日15時23分発行